視点

# 高齢者のアルコール問題への対応と専門医療機関との連携

執筆▶ 小仲宏典　医療法人藤井クリニック 医療相談室 精神保健福祉士

「独居でアルコールの問題を抱えている人が支援拒否をしていて困っている……」「ご家族と同居しているけれど、アルコールの問題が影響しているのか、関係性が悪く、ケアプランの作成がなかなか進まない……」。このようなケースは珍しくないと、ケアマネジャーからの声があった。そこで本稿では、長年アルコール依存症専門病院で精神保健福祉士として患者や家族の支援を行い、現在は地域のクリニックで支援を行っている小仲宏典さんが、ケアマネジャーに向けて現状を打破する基本情報と支援のヒントを提示する。

## はじめに

令和7年度版高齢社会白書[1]によると、日本の高齢化率は29.3%となり、令和25年までは増加傾向が続くとされている。筆者の勤務していたアルコール依存症専門病院（医療法人和気会新生会病院。以下、新生会病院）においても、平成27年度から令和元年度までの5年間、入院患者に占める65歳以上の高齢者の割合は3割前後で推移し、日本社会の高齢化と共に増加してきた。過去のものではあるが、平成17年に介護現場で勤務するケアマネジャー、ヘルパーを対象にした、アルコール問題についてのアンケート調査[2]では、回答者の約8割が何らかのアルコール問題に遭遇している経験を有していた。また、回答者の約3割はアルコール問題が原因でサービスの提供が困難になった経験を、さらに約1割は中止した経験を有しており、アルコール問題への対応の必要性と、その難しさが伺われた。

このような時代背景の中で、専門医療機関の役割を考えるにあたり、筆者の前職である新生会病院における、高齢アルコール依存症者へ取り組みについて報告したい。

## 介護職側の意識やしんどさ

上述した介護職へのアンケート結果のように、介護の現場でよく出会うはずのアルコール問題であるが、支援者側にアルコール依存症に関する知識が十分に無く、具体的な問題に対する介入が難しいことが多い。実際にお酒をやめるように執拗に働きかけると、利用者からの抵抗が生じ、利用者と関係が悪化することが考えられるため、介護職の立場で、訪問先のアルコール問題について踏み込んだ対応をとることの難しさもある。

次に、介護が必要な高齢者の支援をしているのか、アルコールによる失敗の尻拭いをしているのか、分からないまま長期の関わりを持つため、問題を一人で抱え込んでしまうこともしんどさに繋がると思われる。介護職が利用者との関係性を維持しつつ介入を行うためには、他機関と連携した役割分担が有効だと考えられるが、職場外に相談をすることを躊躇われることも多い。実際に、ケアマネジャーがアルコール問題で対応に